

## 『もうひとつの核なき世界』

2014年08月16日

堤未果氏の『ルポ 貧困大国アメリカ』は新書大賞 2009 を受賞した。米国の貧富の格差は深刻で、居場所を失った貧しい若者たちがアフガン、イラク戦争に駆り出されている社会の姿を描き出していた。日本でも、生きる希望をなくした若者たちが「戦争が希望である」などという発言をし、日本も戦争に傾いていく状況に向かっているのではないかと思わされた。貧しさが戦争を生み出していくことは確かである。

堤氏は、ジャーナリストとして、現代社会を鋭く分析する言論活動をしているが、8月に『もうひとつの核なき世界』を上梓している。熱せられたフライパンの上でいられる豆のような、いたたまれない思いにさせられたが、触発されたことを自由に書きたい。

湾岸戦争、アフガン、イラク戦争から帰還した米兵たちの体調不良が問題になっている。もちろん、心的外傷後ストレス障害もあるだろう。小泉元首相が「自衛隊が行く所が非戦闘地域なんです」と言って、イラクに自衛隊員たちを送り出した。彼らは、実際の戦闘に参加しなかったが、帰国後、30名近い人が自死している。恐怖にさいなまれたのであろう。米兵も心的外傷後ストレス障害を受けていることは容易に想像できるが、それだけではなく、劣化ウラン弾の影響もあると疑われている。劣化ウラン弾は、核廃棄物から作られ、戦車やコンクリート壁を貫通させる威力があると、大量に使用された。劣化ウラン弾の放射能が体調不良をもたらし、癌の発症、奇形児の出産を多くしているのではないかと。ところが、米国政府は医学的に関連がないと言い続けている。イラクでは、米兵を数倍する癌の発症と奇形児が出生しているという。福島県の子どもたちに甲状腺癌が多発しているにもかかわらず、放射能の影響は定かでないと言っている。

広島、長崎に人類史上初めて原爆が投下され、未曾有の苦難を受けた。水爆実験で「第五福竜丸」だけではなく、十数隻の漁船も被爆していた。地下核実験によって地中に閉じ込められた放射能は莫大であろう。そして、スリーマイル島、チェルノブイリの原発事故、イラクを中心とした中東の劣化ウラン弾の被害、史上最悪の福島原発事故と続いた。そして、福島原発が垂れ流している放射能は太平洋も汚染し続けている。地球は、放射能汚染にまみれ、その量は拡大の一途である。

原爆を最初に使用した国は、国際的な非難を浴び、立っていけなくなるだろう。核は抑止力として、国際的発言力を増すために用いられている。しかし、人類の英知は「核なき世界」を求めている。そして、核は人間の科学技術では対処できないものである。

米国のオバマ大統領は 2009 年 4 月、プラハで「核なき世界を目指す」と核廃棄に向けて演説した。そして「核兵器を使用したことがある唯一の核保有国として、アメリカは行動する道義的責任があります。アメリカ一国では成功を収めることはできませんが、その先頭に立つこと、その活動を始めることはできるのです」と、原爆投下の責任を認めた。この演説に、広島、長崎の被爆者たちは大歓喜した。しかし、国際政治において「夢」を語ったと冷やかに見る人々もいた。米国は、その後も「臨界前核実験」を止めることはなかった。堤氏は「オバマ大統領の『核なき世界』を『未来を創る』ためのチャンスにどう変えるのか、その選択は私たちの手の中にある」と結んでいる。堤氏の言葉を、私は「核兵器と原発は双子の兄弟」という視点で関わるべきであると思っている。